

比較技術文化よりみた茶道研究へのノート

安 西 一郎

A Note On Teaism

Jiro ANZAI

§ 1. 大徳寺孤篷庵の「山雲床」の茶席の蹲踞

今を去る数年前、米国の前大統領ブッシュ氏が来日、超過密ダイヤ的なスケジュールをこなしたものの、体調をくずされ、急きょ米国仕様の Ambulance と思われる特殊な急救車で入院されるというハプニングがテレビ放映されていたが、その際、くだんの Ambulance の文字が、反転投射された映像のような「鏡像文字」で描かれているのに気付いたものだ。が、それはほんの瞬転裡の印象にすぎず、本論筆者の当座の印象は、大統領の安否を気づかう方向に収斂されてしまい、いつとはなくこの鏡像文字の工夫の提示している比較技術文化的な含意についての考究には及んでいなかった。ところが、昨年の秋になって、『婦人画報』誌の論集子飯田めゆ氏から、わび茶道についての、心理学の視座からする談話の寄與をもとめられたことを契機として、この問題が再浮上してきた。

それにしても、前述の「鏡像文字」を急救車のフロント上部に大書したり、独の BMW 車の一部のように、エア・ダム・スカートに描きこむのは、如何なる技巧なのだろうか？

それは他でもない、路上を先行している他車のバック・ミラー内に、背後に迫っているのが、他ならぬ急救車や、快速を誇る BMW であることを、反転図形の原理にしたがって、正文字として写し出し、前方を塞いでいる車のドライバー諸士に、道をゆづってくれるようにうながす工夫なのである。

わが国でも、BMW のこの発想の後取りのように一部の車が、フロント・バンパー上やエアダム・スカートに「鏡像文字」を印したものがあつたが、ドイツの高速車道上で守られているような大馬力で快速のメルツェデス・ベンツやベア・エム・ヴェー車には、文句なしに道をゆづるという車道エチケットは、この国では定着していなかったもので、いつの間にかこのような取りこみは、すたれてしまったようである。

この鏡像文字の慣習が、今一度、本論筆者の意識に比較技術文化上の問題としてよみがえって来たのは、わび茶道の世界にかかわり、その心理的調心機能をになっている「つくばい」の石面に浮彫された「反転図形」をめぐる点である。

それは他でもない、京は紫野大徳寺の孤蓬庵の一部を形成する「山雲床」の茶庭にしかけられている古銭の形を模したといわれる「布泉」の隸書文字を浮彫したつくばいの文字が、鏡像文字になってをり、そのままでは、まず布泉とはよめないという事実を契機としている。

事実、古銭型の円形のつくばいの中央にあいている水口をめぐる点その左右に描かれているのは向って左が泉(泉)、右が布(布)であるといわれるが、泉の方は左右相蹠であるから、なんとか泉と読めるが、右の字型は、このつくばいのかたわらに鏡をたててみて始めて、鏡面内で反転してこそ布(布)の隸書文字としてよめるものなのである。

いずれにしても、この山雲床の茶席は、小堀遠州(1579-1647)にルーツするという点では、衆目の一致するところであるが、一般には、山雲床の茶席も含めて、大徳寺「孤蓬庵」は火災により焼失し、今の茶席は、石州の再建によるものと言われている他、山雲床のつくばいの銭型とそこに浮彫されている『鏡像文字』にしても、必ずしも遠州の発想と云えるかどうか、との疑問も残る。

それにしても、この布泉と名づけられている盤面をもつ「つくばい」だけが、一見「鏡像文字」風になっているのが気にかかる。これが反転図形風であることは、同じような古銭をかたどりつつも、盤面に浮彫された文字が反転していない、あの竜安寺の「蔵六」の茶席の「つくばい」の吾唯足知が、水口の口を中心に据えた時計まわり文字で、時計まわりに読むという原則さえ気付けば、何人にも容易に解読されうる普通文字のアナグラムになっている点からも、明白な対比を形成するのである。

「蔵六」の茶席の呼名のルーツが、有事の際に頭・前脚二本・後脚二本・尾の六つの部分を甲羅の中に引こめる動物である亀にちなんだものと言う話ならば、観光パンフレットの類にさえ記されている事実であるが、ここのアナグラムが、一端、時計まわりによむというルールをさとしてしまうと、何人にも容易によめる正常文字になっているのと対蹠的に、山雲床のつくばいのそれは、同じような口型の水口を中心にした古銭型である点を除くと、これ以上なく対蹠的な反転図型たる「鏡像文字」となっているのである。気付いてみれば、伊のレオナルド・ダヴィンチ(1452-1519)なども多用した鏡像文字と了解されて終ってしまいそうな、鬼面人を驚ろかす工夫の類とみなされかねないが、更によく考えてみると、これはむしろ「判」文字であったかと思われる。

仮に、この仮説の方が、plausibility はるかに増加するとすると、「判」とみればこそ、このつくばいの施主たる人のアイデンティフィケーションにこそかかわる隠顕暗号ともとられうることになるだろう。

とすれば、「布泉」とは単なる water-spread fountain の意を超えて、施主の雅号の一つではないか、とさえ思われて来るのである。

遠州については、布泉なる雅号を持っていたとは筆者自身も仄聞^{そくぶん}にも聞いていないので、彼の子息のものかも知れないとの作業仮説（Working Hypothesis）をたてて、目下この方面の資料を探究中である。

さて、山雲床のつくばいについては、前々から指摘されているサイフォン技術を駆使したものとの解釈があり、それはそれで興味深いものがあるが、本論筆者はこの「つくばい」についても、全く次元のことなる視座を用意しているのだ。

それは、他でもない。この「つくばい」の水口から布泉式に、銭型の円縁から溢出した小瀑布状の落水がその直下にある円形の洗足盤様の小プールに溜るようになってきていることだ。本論筆者の私見では、この山雲床のつくばい直下の円型の水溜りこそ、文字通りの *ankle-deep pool*（踝したけの水溜り）であり、風爐の季には、今とちがって素足の常住を可としていた男性禪者や武人にとって、むしろ足洗い具として用いられていたと思うべきだろう。

この点を傍証するのが、古い茶席絵図のつくばい直下の石を「洗足石」と名づけた事実であるとの指摘は、本論筆者が旧版の『茶道の心理学』（1971）において特記しておいたところであるが、一昨年出版した『新版・茶道の心理学』（1995）においても、残しておいたものである。

この点も含めて、口漱ぎや手足の清めについても、既に大方の人々が前から指摘、比較されていた点であるが、極端なほどの砂漠地帯にあっては、単に水洗用の水がとばしいばかりでなく、うっかり洗身に水を用いると、気化の潜熱によって体温をうばわれ、烈しいふるえが生じるほどになるので、逆に砂を用いて身体を清めるのである。

つくばい、についてはこの位にして、千利休が京都は山崎の妙喜庵の軒先をかりて建立した有名な躡口を持った「待庵」茶席の結構について論及してみよう。

この利休のほぼ唯一の遺構と人口に膾炙している茶席については、既に多くのことが記されている。

その中でも、この茶席が貴人と目される時代の最高権力者さえ、あえて膝を屈して、にじり入るしかない、特殊な入口を創出し、席入に際して直立歩行しつつ席入りするためのいわゆる縁廊下を一気に廢し、天井の極度に低く、躡り口つきの、結構を案じたことについては既に二十余年前に本論筆者も力説したところである。

もっとも、車高をいちぢるしく低くし、前後の車輪カヴァーたるフェンダー（fender）とフェンダーの間をつないで、ドア下から水平に張り出していた running board（車のステップ）をカットしたのは、クライスラーの1936年版車 Airflow に始まる工夫の先取りと断じたのは、いささか早とちりであった。事実、本格的な乗用車でこれをやったのは、同じ米でもクライス

ラーより更に流線形度のいちぢるしい Pierce Arrow の 1993 年車 Streamline のようである。更に言えば、sports cars や racing cars となると、ほぼ同じ頃に始めから running board を取り付けず、いきなり踏み込めるものもあった。という点も付記しておこう。とは言え、これらは二十世紀も二十年代に入ってからのもので、利休の茶席を精神の他界への脱出の方法と考える限り、フェンダーならぬ縁側を取拂い、躍口という高さの極度に低い door をつけた工夫の超先取という点は、みとめざるを得ないだろう。

極度に低い「躡」口は、単に高さが低いだけではない、それは板戸で、全く窓面をもたない物である。しかも、それには、お詰めが最後に内部より落しかけるロックがついてをり、茶事の進行中は、中立やおひらきの際でもなければ開放されないのである。この点からも茶事の密教性やカトリックを思わす Holy Communion や Sacrament 性が示唆されてひさしいのである。

利休が彼の 38 才時に堺に建立した茶席の向きを南面とし、時々刻々と変じる日射量を、躍や下地窓上にかける簾の上下などによって刻々と変化させ、普通ならば禪者がその眼ぶたの開きを半眼にたもっていることは当然のポーズだが、茶事では複雑な茶事の所作をとどこをりなく行うには、半眼では不可である。(茶事においては、下地窓や障子や簾を多用し道具の側から、禪者が不断から彼の眼ぶたを半眼に保持するのにも似た光量調^{すだれ}制効果を計ったものと、本論筆者は考え、二十余年前の朝日新聞の研究ノートにも、大阪朝日学芸部員の高橋徹氏をわずらはして公表しておいたのである。)

同じような、千利休の類稀な独創的思考として、プルキニエ現象の数百年前の先取があるが、利休が薄暗い所で、赤や黄でなく、青や緑が一きは鮮やかな色として感受されるとの認識からも、秀吉にただ一輪にして御覧ねがった朝顔は、青色だったと思われてならないのである。

ここから先は、想像であるが、利休がはいっていた足袋は、単に表(甲)部が青いだけでなく、裏も白ではなく、共に青色だったと思われる。このように利休の言動を一つ一つ精査して行くと、わがわび茶道を深化(または、進化)の境に入れた利休こそ心理学史以前の、日本最大の傑出した心理学者、ないしは応用心理学者とさえ断じうるのである。

それでは、Socrates も顔まけの勇気をもって自裁した利休の後継者である古田織部(1544-1615)や、その後をついだ小堀遠州(1579-1647)の体格と性格の相関や、その茶風については、現代心理学は、如何なる了解や解釈を提しうるのであるか。

この古田織部こそ、細川三斎と共に、秀吉に罪せられ京を追われた利休を、淀の河原にまで送った人物であるとともに、独の Ernst Kretschmer (1888-1964) が *Medizinische Psychologie* (1922) の中でとりあげた、「画像奔走思考 (Bildstreifendenken)」とも言うべき、次々とまるで奔流のように異型異色の工夫の才を発揮しその産物を茶道具、特に茶陶に入魂した仁である。

多趣味多才は、彼の肥満体躁ウツ気質ともまことに申分なく符合するが、気骨この上ない彼が、大坂城落城直後、一言の申しひらきもせず、自裁していることは、同じような体格気質のミッドウェイ海戦での立役者山口多聞提督の自裁を彷彿させ、同じく肥満体ソウウツ気質者のウツ・サイクルに入った直後の自裁と思われてならないのである。

更に利休と織部両者の対比については、本年一月号の『婦人画報』誌の104頁に、「またクレッチェマー博士の『体格と性格』の相関性については、極小空間に大宇宙を見、単色の黒楽を好んだ利休は筋骨たくましい粘着気質を主に分裂気質的思考の〈画像膠着〉を間欠させる混合型であったろう。画像膠着とは、互いに対蹠的な異次元空間のものをとって来て、これを相当強因にねじふせくつつけてしまう発想で、利休の待庵茶席や彼のそこに造形した洞床や、彼の偏愛した「黒楽」茶碗などや、彼に先立つ信長の（1534-1582）の傑作安土城の天守閣の構造にも、傍証されるように戦闘用のトリデの土台を石でかこみ、その上に本来はシャカの骨をまつていた Stupa の発展形式たる五重の塔をくつつけたものである点にも明白である。

これに対して、織部なき跡に徳川家の茶匠となった小堀遠州の茶器や茶陶は、まさに奔放な、「画像流走思考」となって、流れるようにくり出されて行くだけではなく、師の利休の設定した規範を乗り越えて、織部の茶風と共に、大名茶としてのニーズに応じるようになってこざるを得ないのである。

上のトレンドを何よりも傍証しているのが、山雲床の布泉のつくばいの高度の精神性を示唆する造形にもかかわらず、この席には「躰」が欠けている事実にも傍証されようか？ とは言え、この席庭には遠州の言葉とされる「渡り四分に景六部」を彷彿させる作庭がなされているのであり、上の遠州の言葉が、利休の「渡り六分に、景四分」を逆にしたものであることは言うまでもない。

以上のように、茶庭の歴史的発展や展開を粗描しても、茶庭というものこそ、まさに日本の禅者や禅茶人が、古代の中国から継承しつつも、わが国の風土にあうように、二次的創造（Nach-schöpfung）はおろか、しばしば一次的創造の域まで昇華させていった、ユニークなものであることが、〈知る人ぞ知る〉の評言の如く〈erleben〉されて来るものなのである。

小堀遠州について忘れることの出来ぬのは彼の作事奉行（築城局長官）としての赫々たる業績の前歴であろう。このような表言を用いると、いささか Success Story めくが、徳川時代のような一見平和な社会とみられる体制のサ中においてこそ、作事奉行は大へんな難業であったと思われる。

だが、小堀遠州がその中であつても相当な茶人、というよりも利休・織部の伝統を汚がさぬ茶人であったことは、かの「海すこし見える木の間の月夜かな」を、その作庭の精神としたとの言葉にもうかがえよう。琵琶湖岸の小堀に出自した遠州には、海といっても必ずしも外洋をさしてはいまい、これは彼よりはるか後代の人の作ではあるが、あの藤村庸軒（1613-99）や

北村幽庵の発想になる琵琶湖の景を一望にする「天然図画亭」の先取りのような心が、去来していたのではなからうか？ それも月光に照らされた金波銀波の湖面が、木の間に隠顕的に見え隠れする、というのである。

ここまで述べて来た後、最近ようやく本論筆者の視座へと焦点を結んで来たオーストラリアはシドニー大学教授（1922 to 1948）A. L. Sadler の *Cha-No-Yu, The Japanese Tea Ceremony*（初版、1933, J. L. Thompson & Co., Ltd., Kobe, and Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd. London）についてふれて見たい。

上記の Professor Sadler の著は、今日では神田の Charles Tuttle 社による復刻版が 1963 年の初版から次々と版を重ねてをり、1994 年版には Eleventh Printing の記入があるものである。

その内容は、無数のライン・ドラウイング式のイラストや茶庭や茶席のレイアウトやグラウンド・プランも含み、まさに英語で書かれた茶事に関するエンサイクロペディアの感をあたえるものであるが、如何なる理由か作者 Sadler 教授の死亡年代は、1971 年と明記してあるものの、その出生年については全く言及をかいている。

Tuttle 版の 1994 年版には、*About the Author* と題した後がきの部分に、同教授が、二十六年にわたってシドニー大学の Oriental Study の教授をつとめ、Professor Emeritus をおくられて引退後に英国にわたり 1971 年の死去の日まで英国に居をかまえたところがあるが、先にものべたように、出身については、全く言及が無いのは何故だろうか？ Tuttle 版の後書きによると、Sadler 教授は、The Royal Military Academy において、Professor of Japanese も兼任したようであり、主著としては、*The Life of Tokugawa Iyeyasu* (1936), *A Short History of Japanese Architecture* (1941), *Three Military Classics of China* (1944), *A Short History of Japan* (1946), などもあるようであるが、^{そくぶん} 仄聞はおろか本論筆者は、Sadler の存在を全く知らなかったもので、逆に多に興味をもやしているところである。

その内容は、先述のように Encyclopedia 的で、茶事に関する内外の文献や茶人についての episode を次々と紹介したもので、comprehensive であるが彼の書にはるかに先行する Okakura の *The Book of Tea* (1908) のような宗教的な深みには達していないし、本論筆者が、『茶道の心理学』で徹底してほりさげたような心理学的な了解解釈とは全く無縁のものであるが、茶道と足袋については、わずかながら細川三斎の足もとに配慮して、その母が足袋を作ったと言う程度の言及はなされているが、これも新見解ではない。

Sadler の著の面白いのは、いわゆる茶人にまつわるエピソードをよくしらべて、吉野窓や吉野大夫はおろか、筆者も知らなかった吉良上野介 (1640-1702) の茶人としての低さを傍証するエピソードを紹介し、若し彼によって恥かしめられた武士が短気を起していたら、四十七士の話は、全くちがった様相を呈しただろうと言っていることなどであろう。

今回は、Sadler 書の検討を始めたばかりなので、これ以上の所見はひかえるが、この Prof. Sadler の件は、今後は豪研紀要等にも発表してみるつもりである。

それにしても、本論筆者が論文としてはもちろん豪研紀要の書評でも取りあげた *Betrayal at Pearl Harbor* (1981) の Captain Eric Nave の業にしても、UK の中で最高の技能と識見をもつ日本海軍の最高暗号の解読者 Eric Nave の存在が、彼が上記の真珠湾関係書を公表した後も、わが国の関係者の注意をさしてひかないのは、何故之であろうか？

以上の問題も含めて、今回本論筆者が提示したのは、研究ノートの域を出ていないのであくまでも、研究ノートとして提出させていただくことにした。

参 考 文 献

安西二郎『茶道の心理学』，淡交社（1971）

安西二郎『新版・茶道の心理学』淡交社（1995）

Ernst Kretschmer : *Körperbau und Charakter*, (Springer, 1936)

_____ : *Medizinische Psychologie*, (G. Thieme, 1950)

T. Okakura : *The Book of Tea* (Kenkyu-sha, 1970) (初出は、1908 年)

A. L. Sadler : *Cha-no-yu, The Japanese Tea Ceremony*, (Charles Tuttle, 1962)